

662
1

石見守

新編
繪入

日本契情始
一之卷



序



明治三十九年九月十日

あつちのまゝ
 異國の孝延年が妹の良女容と自慢
 奔るゝいなる病より傾城といひ秘て
 良女容の女乃 稗史なるなり。我朝
 として、整る情のゆゑも、わが女と整情
 ありみだきも、をひやられた怪し男入目
 鉄屑も良人の媚とく、孝延年人の
 わがいをわけて傾城といふもの。稗史也

通 662

上

遊あそびの面白おもしろき酒さけもめめ雙らん鯛たうの。於お此こゝ千せん葉は和わ方かたお
とと子こ白しろ拍は子こねね若わか裸はだか解かの音ね讀よめめたりたり始はじめたり。
今いまはは其その流ながれををららむむ女むすめ一ひと廓くわくとと接くわす
今いま是こゝととああららるるのの由よしととああららるる法はふ分ぶんとと現あらははつつてて契せ情じやう
乃すなは始はじめとと看かん板ばんとと相あ言いととるる而ゆ色しき

千時栄ゆ

元禄三月

作者 自笑

作者 其蹟



日本契情始 一之巻

目録

第一 祝言の盃持あつて納おさめ分ぶん割わり

湯ゆ寝ね灸あの上うへ作しよ也え

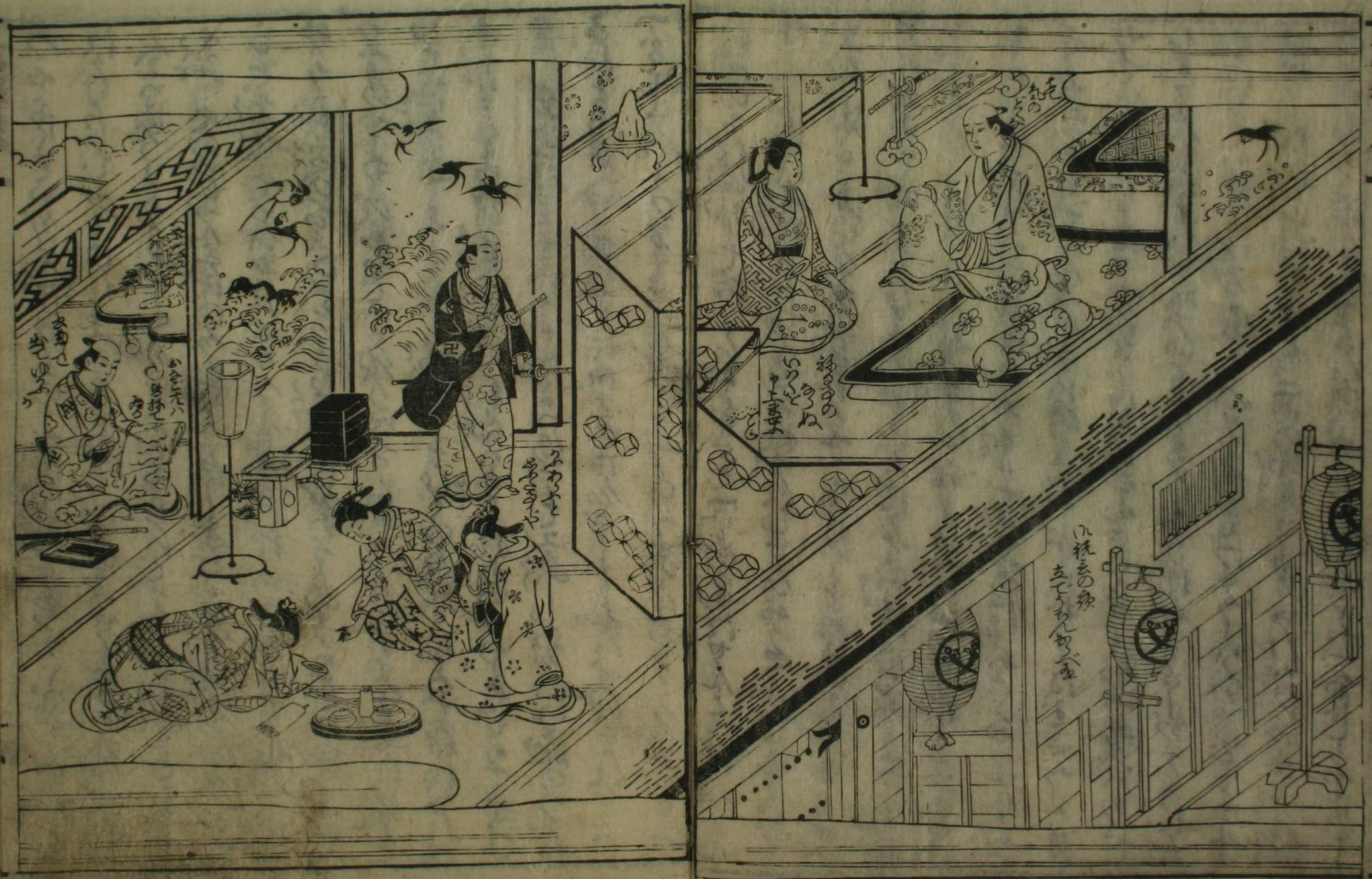
研けん鑿さくののよよいいきき世よににああるる中ちゆう

ああららむむ物ものとといいふふ事こと

麻あ子このの嫁よめ入い小こ神かみ

ししののゆゆでで我われとと汝なんぢとと

ううつつててええせせるる所ところのの状じやう



白巻

日本

白巻

白巻

白巻

